

森 萬佑子 著

朝鮮外交の近代

——宗屬關係から大韓帝國へ——

古 結 諒 子

思想史だけでなく外交史へと研究の幅を豊かに広げている朝鮮近代史研究。朝鮮の近代とは何か、また、その独自の「外交」の姿をどのように捉えるのが、共通の課題になっている。二〇一六年には、酒井裕美『開港期朝鮮の戦略的外交…一八八二—一八八四』（大阪大學出版會）、李穗枝『朝鮮の對日外交戦略…日清戰爭前夜一八七六—一八九三』（法政大學出版局）が出版され、續く二〇一七年に森萬佑子『朝鮮外交の近代…宗屬關係から大韓帝國へ』（名古屋大學出版會）が刊行された。こうして朝鮮近代史の研究成果が日本國內で發表され続けることを、まずは喜びたい。そしてこれらの研究書は、朝鮮近代史研究者にとっても、中國近代史研究者にとっても、そして、日本近代史研究者にとっても熟讀されるべき業績なのである。以下、目次に従って、各章の概要について紹介したい。

序章「朝鮮外交形成の論理」では、これまでの朝鮮近代史研究の動向を概観したのちに本書の課題を五點提示する。一點目は、朝鮮からみた宗屬關係の解明である。續く二點目は本書の最も中心的な課題とも言えよう。それは、朝鮮の對外

關係から外交への轉換を捉え直すことである。その際に中華の存在形態に注目し、一八八二年から九七年までの朝鮮近代史を、宗屬關係存續期にあたる「二元的中華」の時代と、宗屬關係が廢棄され自らが志向する中華に一元化される「一元の中華」の時代という操作概念で整理する。なお、本書は東アジア在來の秩序構造で展開された「事大交隣」といった外交を「對外關係」とし、近代國際關係で展開される外交を「外交」と、その表現を區別する。三點目は、交渉と制度をあわせて論じること、政策構造や思想的基盤を明らかにすることである。四點目は、宗屬關係から大韓帝國までの時間軸をとることであり、最後の五點目は、「反清・自主政策」や「戰略的外交」といった議論と本書の立場を示すことである。それは、朝鮮からみた「事大交隣」の解明であるとする。

本書は大きく二部構成となっている。第一部「宗屬關係の變容——二元的中華の時代」は、清朝が公的に繼承する中華と、朝鮮自らを正統な繼承者とする中華の「二元的中華」を有した時期を扱う。朝鮮が清朝の屬國でありながら、日本や西洋諸國との關係で自主であった一八八二年から日清戰爭までである。

第一章「宗屬關係の中の條約關係——領選使から駐津大員へ（一八八三～八六年）」は、一八八三年から八六年に派遣された駐津大員を取り上げ、派遣経緯や使節の性格、實際の行動内容を分析する。これまでの研究は、駐津大員と駐津督理の性格を近代國際法の観点から理解しようとした。これに對して本章は、駐津大員が宗屬關係に基づいた既存の貢使や領選使を繼承・發展させた使節であり、清朝側の制度や政策の近代的變容に對應するため天津に派遣されたことを指摘する。駐津大員は一八八二年に締結された中國朝鮮商民水陸貿易章程に基づき、清朝側の朝鮮擔當窓口（北洋大臣・津海關道）との對話可能な常設の職位として創設された。主な活動は西洋式軍備の視察や朝露陸路通商問題への對應など、清朝間の時々の問題に關する協議であり、常駐することなく、領選使と似ていた。職務規定も先の「領選使節目」が援用され、朝鮮政府は宗屬關係に基づいた既存の貢使に近い性格の使節とみなしていた。

第二章「宗屬關係と條約關係の交錯——駐津大員から駐津督理へ（一八八六～九四年）」は、前章で明らかになった駐

津大員の性格や活動實態を踏まえた上で、駐津督理の性格と活動實態を扱う。その際、朝鮮の近代國際關係への參入という観点よりも、宗屬關係と條約關係の交錯狀態に對して朝鮮がいかに「對應」しようとしたのかを検討する。一八八三年段階では宗屬關係の中で處理されていた駐津大員は、一八八六年に入ると宗屬關係の要素を維持しつつ、近代國際關係を意識した領事のような性格をもつ駐津督理に改編されていった。この改編は、初代駐日辦理大臣、初代駐米全權大臣の任命・派遣が相次ぐ時期であり、朝鮮政府が近代的要素を取り込んで對外關係を改編する時期と重なっていた。同時に、新たな職務規定の草稿と推察される『駐津督理公署章程底稿』によると、駐津督理はあくまで水陸章程に基づく使節として位置付けられ、その業務も領事に類する業務と宗屬關係に關する業務の兩方を擔っていた。

第三章「對外實務の條約關係への對應——統理交涉通商事務衙門の形成」は、在外使節の變化を扱った前章に對し、一八八二年から九四年まで對外關係事務を管掌した統理交涉通商事務衙門（外衙門）の運營狀況に迫ることで、外政機構の變容過程を検證する。それにより、對外關係において二つの劃期があったことを指摘する。一つは、一八八七年に前後する時期である。一八八七年、外衙門創設當初の職務規定である『統理交涉通商事務衙門章程』（「章程」）は『統理交涉通商事務衙門續章程』（「續章程」）に改められ、組織も改編された。これは、在外使節の變化や新設と聯動していた。『續章程』制定の背景には、各國との條約や章程で決められた事柄を遂行するための主事人員の増員と職務内容の變更があった。もう一つは、一八九二年に前後する時期である。九一年頃から主事の出勤者数は減り、九二年秋ごろから出勤メンバーが固定化され、總務司に選出された。「總務」の誕生は、對外關係を扱う専門官の萌芽であり、外衙門の實務を繼續して擔當する體制が整えられた。

第四章「宗屬關係の可視化と朝鮮政府——神貞王后逝去をめぐって」では、一八九〇年の大王妃神貞王后趙氏逝去時の朝鮮政府の對應と、漢城に駐在した各國代表のそれへの對應を取り上げ、一八九〇年以降の外政機構の變化と對外政策がいかにかわっていたのかを考察する。神貞王后の逝去によって葬禮の問題が浮上し、經濟的困窮を背景とした葬禮時

の暴動の危機や、中國皇帝が派遣する敕使への朝鮮國王の對應方法が懸念された。前者については、アメリカ公使にアメリカ兵による「保護」（王宮周邊の護衛や發軔時の護衛）を依頼した。後者について朝鮮は敕使の派遣中止を清に要請するが、敕使が水路で派遣され、朝鮮は敕使の賜物を受け取らないといったことが決められた。そして、國王は敕使に對する儀禮を、宗屬典禮に即して遂行した。朝鮮政府は近代國際關係を考慮しつつも、結局は清朝との宗屬關係を優先する對應を行ったのである。また、國王の敕使に對する儀禮をみた各國代表は清朝の宗主權は否定できないことを再認するが、「知らないふり」をしてバランスを保っていた。

第Ⅱ部「大韓帝國の成立——一元的中華の時代」は、日清戰爭によつて清との宗屬關係が終焉し、朝鮮が志向する中華に一元化される時期を論じる。日清開戦前夜から、清朝との關係が廢棄されたことで外政機構を近代的に整備し、「一元的中華」を具現化する大韓帝國の成立までを扱う。

第五章「朝鮮からみた日清開戦過程」は、日清兩軍の朝鮮駐屯から日本による王宮占據までのあいだの、日清開戦過程における朝鮮政府の對外政策・交渉の展開を検討する。朝鮮政府は日清開戦前後、宗屬關係を主に据えながら近代國際關係を副として交渉する對外政策をとり續けた。東學農民運動鎮壓のために清朝に借兵を要請したが、これは一八八二年以降の宗屬關係と近代國際關係が交錯する中で、宗屬關係を優先する對外政策の延長線上にあった。日清兩軍の朝鮮駐屯後も引き続き清朝に援兵派遣を求めてさらなる「保護」を求めたが、戦局は日本の優勢のうちに展開した。この清との交渉の際、天津の駐津督理は「仲介役」としての役割を果たしたが、本國での日清衝突の状況を正確に把握していなかった。いっぽう、朝鮮政府は各國に對しても調停を要請した。こちらは萬國公法や朝米修好通商條約第一條にある周旋條項に基づいていたが、結局は影響力が無かった。しかも、條約に基づいて派遣された在外公使も十分に機能を果たせなかった。ただし、宗屬關係と條約關係という一見相反する二つの論理に基づく以上の交渉は、朝鮮にとっては「保護」の概念で通底するものであった。

第六章「對外實務の條約關係への特化——宗屬關係の終焉」は、日清開戦過程および宗屬關係の終焉という東アジア國際關係の劃期に行われた甲午改革をとりあげ、外政機構である統理交涉通商事務衙門（外衙門）がいかに變化したのかを、主事の職務内容の變化に着目してたどる。開戦前、それまで「總務」が實務を擔當していた外衙門で、萬國公法に明るい兪吉濬が「主事」として實務を擔當した。このことは、朝鮮政府が日清開戦過程の對外交渉を重視していたことを示す。また、日本から内政改革要求を受け、朝鮮政府は外衙門を外務衙門に改稱し、九五年四月にはさらに外部と改稱して組織を改編した。この過程で職務規定である『續章程』は『外務衙門官制』や『外部官制』にも繼承され、近代國際關係のみに對應する機關としての制度が整えられていった。つまり、外衙門の時代からすでに條約關係に對應する近代的要素を取り込んだ改編を行っていたため、宗屬關係の消滅という對清關係の變化によって、外衙門は甲午改革で近代外交に特化した外政機構となった。

第七章「大韓帝國の成立と中華——一元化の歸結」は、大韓帝國が一八九七年一〇月に成立した意味を、宗屬關係の廢棄に着目して検討する。大韓帝國の成立は、宗屬關係と近代國際關係が交錯していた時期に朝鮮が描いてきた對外關係の歸結である。それは、「二元的中華」から「二元的中華」への轉換の歸結であった。乙未事變・露館播遷以後、大きくなったロシアの影響力に對して危機感を抱いた日本と朝鮮は、日本の皇太后（のちの英照皇太后）の逝去を契機に接近し始めた。朝鮮は宮中喪の實施や大喪儀への大使の參列など他國よりも丁寧な對應をし、日本政府は高宗に大勳位菊花大綬章を送るなどして感謝の意を示したのである。そして、日本は各國に先んじて高宗の皇帝即位を承認し、高宗の歡心を買った。また、高宗が明朝の儀禮に倣って皇帝即位式を遂行したのは、清朝との外交關係が斷絶して、公式に皇帝即位を傳えず。なくてもよい時期でもあった。清朝との國交斷絶期に朝鮮における中華の一元化を具現する大韓帝國の成立させたのである。

附章「朝鮮政治・外交の變容と朴定陽」は初代駐米全權大臣、高宗からの信任も厚かった朴定陽（一八四一―一九〇五）

を鑑にして、朝鮮の對外體制の變容を論じる。

そして、終章「中華のゆくえと朝鮮近代」は、序章で提示した「一元的中華」・「二元的中華」という概念を用いて、各章で明らかにした交渉や制度の背景にある政策の構造や理念を再論する。「二元的中華」の時代には、政策と制度が一致しない部分が見られたが、「一元的中華」に轉換する過程では、既に近代的要素を取り入れていた外政機構は、近代的な外交制度となった。一方、「二元的中華」において宗屬關係を優先した政策は、「一元的中華」では新たな「保護」をロシアに求めつつ、朝鮮固有の世界觀や甲午改革の經驗を踏まえ、中華の正統な繼承者たることの歸結として大韓帝國を形成した。中華が一元化するときに制度と政策の一致があり、一人高宗だけが政治的リーダーシップを強化しえたのである。以上が、私なりに理解した概要である。これから日本史の側から注目すべき点について言及してみたい。

本書の劃期性は、『朝鮮外交の近代』において、一八九七年一〇月大韓帝國の成立の重要性を明言している点である。この点は、日清戦争に伴う清韓關係の消滅とその再生という時期區分を行い、日本側から見ても大韓帝國前と後で朝鮮に對する各國の姿勢に變化が生じている点に言及した拙著（『日清戦争における日本外交』名古屋大學出版會、二〇一六年）とも重なる。だが、やはり朝鮮史でなければできない、説得力のある史實の補強や議論の展開を、本書は鮮やかに繰り広げているのである。

とくに日清戦争後の日本の動向にも關係する、注目すべき實證として、第七章が挙げられる。戦後朝鮮半島では、高宗の妃である閔妃が殺害される事件（乙未事變、一八九五年一〇月）をきっかけに日朝關係は一層悪化し、さらに高宗がロシア公使館に身を寄せた露館播遷事件が生じた。このことから、日清戦後當時の朝鮮・大韓帝國の外交政策が「反日・親露」であったとする見方や、朝鮮半島における影響力を後退させた日本の外交政策が日露協商路線をとっていたとする見方に基づき、日清戦後の朝鮮半島情勢を日露戦争や韓国併合への過程として、歴史を聯續的に描く研究も多い。だが、日清戦争による清韓關係の變化を評價すると、拙著や本書が示すように、一度、大韓帝國の成立で前後の時代を區分するこ

とも可能ではないだろうか。本書は日清戦後の日朝関係の新たな側面を、高宗による皇帝即位過程から見出し、大韓帝國成立に關する研究業績を深めたことは確かである。これは東アジア近代史の空白を見事に補っているのである。

なかでも日清戦争後に天皇が高宗に大勳位菊花大綬章を授與した事實を追った點は、非常に興味深い。日本は勳章の贈答を一八七九年から本格化させるが、本書が辿った事實は、天皇が初めて東アジア域内の國家元首に勳章を授與した事例であると考えられる。そのため、今後、儀禮の外交的役割を日清戦争後の新たな東アジア國際關係の形成といった觀點から研究する上で、非常に價値ある實證分析を日本史に提供しているのである。

また、「對外關係」と「外交」という言葉を使い分けてその混同を避けた點、中華に基づく對外關係の理念と條約關係の理念を對立圖式で見るとはなく、むしろ「保護」（「事大字小」の「小をいしむ」という意味に近い）という互換性があることに注目した點も評價されよう。さらに、甲申政變以降の外政機構の變容過程の檢證から、朝鮮政府における對外關係の劃期の存在をいくつか指摘しており、日清戦争までの過程を目的論的ではなく紆餘曲折的に見ようとする姿勢も首肯できる。一八九〇年代を扱う研究が少ないことを指摘し、これまで十分に活用されてこなかった『草記』や『本衙門草記臚錄』、『統椽日記』といった史料を積極的に用い、研究水準向上に貢献しているのである。

史料の性格や特徴に關する言及も丁寧に行われている。たとえば、「朝鮮に残る記録、例えば『承政院日記』のような政府の公式記録では、屬國である朝鮮が中國に對して反抗したり意見したりするような記録は記せないという事情がある。」（一三四頁）や、駐米全權大臣朴定陽の「美行日記」（一八八七年九月二五日〜八九年七月二四日）における脱落部分の存在、史料内における「中國」という表現方法の存在から記録の公的性格を指摘するなど、史料研究を今後より充實させる指摘も見落とせないであろう（二三三〜二四四頁）。

また、本書の文章はとてもわかりやすくはつきりしている。多少、内容の説明を繰り返すことで、讀者に伝えようとする姿勢が文章に表れている。先行研究との差異、とくに同じ宗屬關係を扱っても中國史と朝鮮史の理解に相違がある

ことに言及しており、非常に好感を持てるのである。

ただし、若干の疑問点もあるため、いくつか指摘してみたい。

まず、本文で頻用する「近代」または「近代的」という言葉をどう解釋すると良いだろうか。序章では「西洋近代」と「東アジア近代」で解釋が分かれている研究動向を提示している（六〇七頁）。しかし、本書の分析や説明では主に前者として用いている。

たとえば、第二章の表題は「宗屬關係と條約關係の交錯」とあり、その後、「宗屬關係と近代國際關係が交錯」（一四〇―一四二頁）との表現や、「條約關係と宗屬關係が交錯」（一四九頁）、大韓帝國の成立は「宗屬關係と近代國際關係が交錯」する時期に朝鮮が摸索した對外政策の歸結（二〇二頁）との表現が登場する。これらのことから、近代國際關係＝條約關係として用いていると判斷できる。そのため、序章で「西洋近代」と「東アジア近代」の二項對立的構圖から抜け出そうとしながら、逆にこの構圖に依存して論を進めていると解釋されかねないのであるかと感じた。「西洋近代」とも「東アジア近代」とも異なる「朝鮮の近代」を提示したかと思われるが、その點に關する説明を強調することが望まれる。同様に、第二章の表題でもある「宗屬關係と條約關係の交錯」、または、宗屬關係と近代國際關係が、いかなる關係であり、その交錯關係が時代と共にどのように變化すると考えているのかが氣になった。

第一章の表題は「宗屬關係の中の條約關係」となっており、その他の場所でも「議論すべき問題は、宗屬關係か條約體制かではなく條約關係をも包攝した宗屬關係についてであるといえる」（一九頁）と、むしろ宗屬關係の中に條約關係をとりこんでいることを指摘している。この點は宗屬關係と條約關係の二項對立から脱しようとしている點で重要な指摘である。後者が前者を壓倒していく過程にのみ研究者の眼が向けられるが、本書は兩者の相互關係の在り様に對する解釋をより一層深めており、「近代國際關係と宗屬關係が抵觸する現場では宗屬關係を上位に据える政策」（二六〇頁）と、政策の實踐方法についても指摘しているのである。ただし、議論の前提となる「條約關係をも包攝した宗屬關係」の具體的な

姿が、本書の説明では政策や制度の運用方法に限定されている。そのため、当時の朝鮮をとりまく諸條約の内容に關する説明も一方ではあつてもよいのではないかと考えさせられた。

もちろん今後の課題になると思われるが、前掲酒井氏の研究が扱うように、日朝修好條規、朝米（英・ほか）修好通商條約、中朝商民水陸貿易章程の締結とその運用・履行の時期である一八八二年から八四年をどのように捉えるのが重要となる。本書もまた、朝鮮が歐米と條約を結び始め、清とも章程を結び、日朝修好條規の内容も變化する一八八二年に注目する重要性を序章五～九頁で指摘し、前掲李穗枝第三章、第四章も同時期を扱う。これらのことから、森氏が主張する「宗屬關係の中の條約關係」の具體的姿として、政策や制度の運用方法だけではなく、一九世紀末當時の朝鮮をとりまく條約内容の分析や、また、そもそもどの條約・條規・章程を指すのかといった前提條件を明示することも、求められよう。

また、本書の課題の一つである、一八八二年から九七年の朝鮮の對外關係から外交への轉換を捉え直すにあたり、①制度や政策の運用における屬人的要素や、②第七章や附章以外の章での高宗の對外的立ち位置をもう少し強調すると、「一元的中華」「二元的中華」という操作概念の有效性をより一層發揮できたのではないだろうか。

本書は、とくに第一、二、三、六章が制度に關する分析となっており、實證的かつ詳細である。朝鮮近代史研究における「制度史研究の脆弱さ」（二三頁）故に、その分析に集中した姿勢を評價できよう。だが、同じ政策や制度でも、誰がどのような状況で提案したのかにより、その効果は異なる。そのため、制度や政策の運用における屬人的要素がどのような機能したのか、その點を意識した記述を本書全體にバランスよく散りばめても良かったのではないかと感じた。ただし、制度や政策の分析で完結している章がある一方で、本書には朴定陽を通して朝鮮近代における政治・外交の變容を見ようとした、附章のような分析も存在する。このことから、森氏が屬人的要素の重要性について看過しているわけではないことを附言しておきたい。

また、「一元的中華」「二元的中華」については「朝鮮の對外關係は公的な繼承者である清朝が體現する中華と、正統な繼承者を自任する朝鮮にとつての中華」（二二頁）との説明がある。ここで重要な人物となるのが、やはり高宗と思われるが、高宗の動向については本書前半での言及が少なく、後半でやや性急に登場する印象を受ける。本書も高宗に注目する重要性については意識しており、「史料の制約から、高宗の考えを直接的に明らかにすることは難しい」（二〇一頁）と述べる。だが、高宗自身の考えよりもむしろ行動からその對外的役割・機能に注目することは、可能であろう。

本書には制度を扱う章と政策を扱う章がそれぞれ獨立して存在し、操作概念は各章をつなげる役割を擔っている。だが本書の適用の仕方では、對外政策や制度の分析結果に對してやや無理に當てはめている印象を受ける。宗屬關係存續期と下關係約後の、時代區分としての役割にすぎず、思想史と外交史研究の融合性を十分に發揮しえていない點が悔やまれた。

そして、本書を越えた指摘にはなるが、敢えて「一元的中華」や「二元的中華」といった操作概念を用いないという選擇肢もあつたかと思われる。その場合、朝鮮の對外關係や外交を、高宗を中心に多元的に捉えることが朝鮮近代史研究の課題となろう。

本書には日清開戦直前について、「近代外交でいうところの在外公使の機能が十分に果たせていた」とは言い難い狀況は、朝鮮政府の對外政策を論じる上で見過ごせない事柄である。そもそも、何のために朝鮮政府は在外に使節を駐在させていたのだろうか」との著者自身の問いかけがある。その上で、今後は「實質的機能についても考えていかなければならない」と、研究課題を提示する（一七〇頁）。日清開戦直前の朝鮮に限るが、評者としては、出先よりも本國での交渉を優先していた場面や、近代外交でいうところの正規ルートより密使派遣などの非正規ルートを對外交渉の主軸としていた場面があつたのではないかと疑問が浮かんだ。前掲李穗枝氏の研究でも、高宗による密使派遣など制度の枠外で行われる交渉を描寫する。森山茂徳氏も「高宗の行動様式、思想、政策などについては、單に宮廷政治家のそれを超えており、今後の研究の課題である」と指摘している。また、同時代の日本外交を扱う評者からしても、酒井氏が指摘するように「朝

鮮政府」または「朝鮮」が指すものが具體的に見えにくく（前掲酒井、三頁）、高宗の動向次第で政策が一變してしまう印象を受ける。そのため、朝鮮の對外關係や外交は、高宗を中心に事實關係を整理すると、その多元性をクリアに表現できるのではないだろうか。

そして、論旨には關係しない些末な點ではあるが、第五章で「本國での日清衝突の状況」（二七〇頁）や、「戦況把握」や「戦局」（二七一頁）という表現を用いている。朝鮮半島に日清兩國が駐兵するものの雙方離れており、軍事的衝突が発生していない状況をこのように表現している點が氣になった。また、第四章に「神貞王后逝去を受け四月二八日に開催された外交官たちの會議」（二三三頁）とあるが、その説明の前に「一八日にアメリカ公使館で開かれた公使・領事會議」の記述があり、「二〇日附フランス公使の本國宛報告」（二三三頁）との記述があることから、「四月一八日」の誤記であろう。

以上、ないものねだりの指摘もしてしまったが、その多くは、決して本書の實證研究の貢獻を損なうものではない。本書の構成上に關わる問題であったり、本書を越えた、近年の東アジア近代史研究動向全體に關係する問題である。本書の出現により、讀者は一八八二年から九七年の朝鮮外交の像の一つを持ちうるのである。そして、朝鮮近代史の研究書が日本語で読める研究環境が整っていることを自覺し、今後、こうした研究成果を活かす姿勢が求められるのである。

註

- (1) ジョン・ブリン「近代外交體制の創出と天皇」（荒野 泰典ほか編『日本の對外關係？ 近代化する日本』吉川弘 文館、二〇一二年）
- (2) 森山茂『近代日韓關係史研究——朝鮮植民地化と國際關係』（東京大學出版會、一九八七年）一六五頁、註二三。